

明日 への 話題

BRICsの 終焉？



東京大学大学院経済学研究科
教授

いとう もとしげ
伊藤 元重

年初から新興国市場からの資金流出の動きが世界経済を揺さぶった。中国経済の先行きへの懸念、原油価格の暴落、新興国通貨の大幅な下落などで、グローバルマネーはすっかりリスクオフの状態になってしまった。この原稿が出るころにマネーの動きがどうなっているか分からないが、世界経済の大きなトレンドの変化について考えるよい機会だろう。

少し前に、BRICsという言葉を生み出したことで知られるゴールドマン・サックスのオニール氏と話をしたことがある。2001年にニューヨークのワールドトレードセンターにテロリストに乗っ取られた航空機が突っ込むというできごとがあった。9・11を転機に世界の政治経済は大きく変わってしまった。

当時、世界経済の見通しに悲観的な人が多かった。しかし、オニール氏はそう考えなかったようだ。これからは新興国が世界を牽引する。その象徴がBRICsだったのだ。現実にも、この予想は大きくあたり、世界経済は歴史始まって以来の高い成長率を達成する。その原動力となったのが、新興国であったのだ。

日本や米国などが金融の超緩和状態にあったことも、こうした動きを助長したのかもしれない。資金はエマージング（新興国）に、そしてエネルギーや資源に向かっていった。それがますます世界経済を刺激したのだ。

2008年のリーマンショックが大きな転機となった。ただ、多くの人の目には、新興国向けの資金の流れが大きく変わったというようには見えなかった。リーマンショック直後は、新興国も先進国も、世界中の国が混乱したのだ。そもそもリーマンショックの震源地は、先進国である米国であった。

そしてリーマンショック後の中国の過剰なケインズ政策が、状況をますます複雑にした。リーマンショックから最初に回復したかに見えたのは中国であった。一時は12%という急速な成長率となった。原油価格もそれと軌を一にするかのように回復し、高値で推移していった。

しかし、今になって考えれば、リーマンショック後の中国の過剰なケインズ政策が中国の歪みをますます大きくしてしまった。それが中国を現在苦しめている。中国経済の先行きが懸念される中で、世界はあらためて新興国にマネーが向かう流れが大きく逆転したことを認識することになる。一時的なパニックによるリスクオフの動きは別としても、グローバルな経済のトレンドが大きく変わりつつあることは確かだ。